

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	3570200919		
法人名	医療法人 和同会		
事業所名	宇部西 グループホーム (あゆみユニット・いづみユニット)		
所在地	〒759-0207 山口県宇部市大字際波字東河田287番地の1 Tel 0836-45-2323		
自己評価作成日	令和05年07月17日	評価結果市町受理日	令和05年12月01日

※事業所の基本情報は、介護サービス情報の公表制度ホームページで閲覧してください。

基本情報リンク先	https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/35/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 北九州シーダブル協会		
所在地	福岡県北九州市小倉北区真鶴2丁目5番27号 Tel 093-582-0294		
訪問調査日	令和05年08月24日	評価結果確定日	令和05年09月12日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

宇部西リハビリテーション病院の併設事業所の為、入居者の状態変化に関して相談や治療など、状況に合わせた対応を行える体制が整っている。医師や看護師、栄養士、療士など連携を図り、一人ひとりにの状態に合わせたサービスを提供する為に、情報を共有しサービス内容を検討し対応している。新型コロナウイルスの関係で外出や面会が難しかったが、現在は制限はあるが面会が可能となった。日頃の様子や活動状況などをカメラで撮影し、グループホームだよりに掲載、ここでの様子を家族へ報告している。撮影したら保存しておきグループホームだより以外で使用する機会も準備している。年間行事・活動計画を立て、季節や入居者の状態に合わせたお楽しみ会や調理・園芸・制作活動等、楽しく過ごせる時間を提供している。感染防止対策にて中止していた勉強会を再開し、学研ナーシングでの学習、自己学習と自己研鑽を勧め各自スキルアップに努めている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

法人内関連事業所が集まる「宇部西FITタウン」の一角に、2002年8月に開設された定員18名の地域密着型グループホームである。隣接する母体である宇部西リハビリテーション病院を始め、法人内に多くの事業所があるため、各専門職と連携しながら利用者一人ひとりの状態に合わせたきめ細やかなサービスの提供が可能である。広いペランダに土を入れ畑を使った本格的な園芸活動に年間を通じて取り組み、花や野菜を育て、収穫することを通して、季節の移り変わりを感じる豊かな暮らしを支援している。また、コロナ禍で外出等が制限される中、ホームの中で少しでも楽しんでもらいたいとの思いから、季節毎の行事やお楽しみ会、調理、制作活動等を企画し、それらに取り組み利用者の笑顔をたくさん載せた事業所だよりを毎月送付して、家族の安心と信頼に繋げている。質の高い職員が定着し、「リスク、行事、活動、書式、新聞、環境」の各係の役割をしっかりと担い、全体の質の向上に取り組んでいる、「宇部西グループホーム」である。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～56で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓該当するものに○印		項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓該当するものに○印	
57	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:24. 25. 26)	○	1. ほぼ全ての利用者の	64	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:10. 11. 20)	○	1. ほぼ全ての家族と
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 家族の2/3くらいと
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 家族の1/3くらいと
			4. ほとんど掴んでいない				4. ほとんどできていない
58	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:19. 39)	○	1. 毎日ある	65	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2. 21)	○	1. ほぼ毎日のように
			2. 数日に1回程度ある				2. 数日に1回程度
			3. たまにある				3. たまに
			4. ほとんどない				4. ほとんどない
59	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:39)	○	1. ほぼ全ての利用者が	66	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:5)	○	1. 大いに増えている
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 少しずつ増えている
			3. 利用者の1/3くらいが				3. あまり増えていない
			4. ほとんどいない				4. 全くいない
60	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:38. 39)	○	1. ほぼ全ての利用者が	67	職員は、生き活きと働けている (参考項目:12. 13)	○	1. ほぼ全ての職員が
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 職員の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 職員の1/3くらいが
			4. ほとんどいない				4. ほとんどいない
61	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:50)	○	1. ほぼ全ての利用者が	68	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない				4. ほとんどいない
62	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごしている (参考項目:31. 32)	○	1. ほぼ全ての利用者が	69	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 家族等の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 家族等の1/3くらいが
			4. ほとんどいない				4. ほとんどできていない
63	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:29)	○	1. ほぼ全ての利用者が				1. ほぼ全ての家族等が
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 家族等の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 家族等の1/3くらいが
			4. ほとんどいない				4. ほとんどできていない

自己評価および外部評価結果

〔セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。〕

自己 外部	項目	自己評価	外部評価		
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	病院の基本理念を元に、事業所理念を作成しステーション内や各ユニットに掲載している。会議や書面にて全職員に通達されている。病院の理念については、朝礼での唱和、各自名札に入れている。	グループホーム独自の介護理念を各ユニットに掲示し、ホーム便りにも毎月掲載している。毎日の申し送り時に理念を職員が唱和出来る時には唱和して、理念を基にした介護が実践出来ているかを確認している。年度初めにグループホームの目標を策定し、定期的に達成状況を話し合っている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地元の自次会に加入しており、地域のお祭りや敬老会、病院主催の行事等に声を掛けて頂き交流する機会を設けているが、入居者の状態やスタッフの確保が難しく、現在は、新型コロナウイルス感染対策にて交流は行っていない。	自治会に加入し、コロナ対策以前は、地域の行事や活動に利用者と職員が参加し、交流を図っていた。法人のイベントやボランティアの受け入れも中止していたが、新型コロナ「5類」移行に伴い、状況判断しながら、認知症カフェや地域の祭りへの参加等、地域交流を再開していくことを検討している。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	病院や同敷地内の施設と共同し、定期的な活動や学習会、研修会を実施。認知症に対するイベントも行われている。新型コロナウイルス感染対策にて学習会や研修等、縮小されている。		
4	(3)	○評価の意義の理解と活用 運営者、管理者、職員は、自己評価及び外部評価を実施する意義を理解し、評価を活かして具体的な改善に取り組んでいる。	自己評価の意義を伝え、全職員に書類を確認してもらい可能な範囲で意見をもらっている。外部評価の書類も確認してもらい、業務の見直しの機会と考え、改善できるよう検討し取り組んでいる。	管理者は職員に自己評価の意義や目的を説明し、職員一人ひとりが自己評価に取り組むことで外部評価に関わり、ホームの運営や業務改善に繋げている。評価結果を回覧し、結果を踏まえて、職員間で業務の改善に向けた取り組みが行われている。	
5	(4)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2ヶ月に1回開催、市職員、民生委員、入居者、家族、職員が参加し事業所の現状や取り組みについて伝達、話し合っている。家族にも毎回参加を求めている。新型コロナウイルス感染対策にて会議を中止し、文章での情報提供を行っていたが、今年度は再開している。	新型コロナウイルス感染症「5類」に移行されたことを受け、対面式の会議を再開している。会議を2ヶ月毎に開催し、ホームの運営や取り組み、利用者状況等について報告し、参加委員からは、意見や質問、情報を提供して貰いホーム運営に反映させている。	
6	(5)	○市町との連携 市町担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	運営推進会議にて、サービスの内容や取り組みについて伝え、意見交換や相談、疑問点などあれば相談させてもらっている。協力関係を築けるよう努めている。市により取り組みや回答に違いがある場合もある。	法人敷地内に地域包括支援センターがあるので、日常業務に就いては常に相談出来る体制を整えている。運営推進会議に行政職員の参加を得て、ホームの現状を理解してもらい、アドバイスや情報交換しながら協力関係を築いている。疑問点があれば、その都度、行政担当窓口相談している。	
7	(6)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	毎月病院内の身体拘束ゼロ推進委員会に参加し身体拘束をしないケアについて理解を深めている。病院内の研修会や外部の研修に参加するよう努めている。マニュアルや研修会の資料はいつでも閲覧できるようにしてある。時間帯や状況により玄関の施錠を行っている。	毎月法人内の身体拘束ゼロ推進委員会に職員が参加し、ホームに持ち帰り伝達研修を行い、職員は、身体拘束が利用者に及ぼす弊害について理解を深め、身体拘束をしない、させない介護サービスに取り組んでいる。玄関は、職員体制や利用者の状態に合わせて危険防止のために施錠する場合もある。	

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないよう注意を払い、防止に努めている	毎月病院内の虐待防止委員会に参加し、虐待についての理解を深めるよう資料等で伝え、常時、虐待に繋がっていないか意識している。新型コロナウイルス感染対策の為、研修への参加が難しかったが、少しずつ参加できるようになってきてる。		
9		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	日常生活自立支援事業や成年後見制度について、必要であれば相談できる体制をとっており、活用に結びつけるように努める。現在、対象者無し。		
10		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	必要時、家族へ電話や来所を求め説明し不安や疑問の解消に努め、理解や承諾を頂いている。分かりやすく説明すると共に、伝わっているかを確認するようにしている。上司とも相談し対応している。		
11	(7)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等からの相談、苦情の受付体制や処理手続きを定め周知するとともに、意見や要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	運営推進会議や意見箱の設置、家族と定期的に連絡を取り思いを伝えてもらえるような関係作りに努めている。意見や要望があれば、全職員で情報を共有し検討するようにしている。相談、苦情の窓口の説明も行っている。	面会制限を緩和し、面会時や電話で利用者の健康状態や暮らしぶりを報告し、家族の意見や要望、心配な事を聴き取り、ホーム運営や利用者の日常介護に反映させている。また、事業所便りを毎月家族に送付して、ホームの取り組や利用者の暮らしぶりを見てもらい、家族の安心に繋げている。コロナ禍以前は年1回家族交流会を行っていたが、現在はコロナ禍の中で自粛している。	
12	(8)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	月1回、事業所内での会議を行い意見や要望、提案など聞き検討する機会を設けている。話しやすい雰囲気作りにも努めている。必要時には、アンケートや個別での面談も行っている。	月1回、出勤している職員で職員会議を開催している。話し易い雰囲気の中で、職員の意見や要望、提案等が出され、関係者で検討して、出来る事から速やかに実践できるように取り組んでいる。当日出席できない職員には事前に議題を上げてもらい、会議後は、議事録を回覧して内容の周知に取り組んでいる。	
13		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	無理のない範囲で勤務体制や調整を行っている。話し合いや意見を聞く場はあるが、職場環境や給与へは反映されにくく、各自が向上心を持って働く環境とは言い切れない。		
14	(9)	○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	希望の研修には参加できるようにし、全職員が偏りなく研修に参加できるよう配慮している。新型コロナウイルス感染対策にて研修への参加が難しかったが、徐々に緩和されてきている。学研や資料での自己学習を勧め、検討事項があれば一緒に考えている。	新型コロナウイルス感染[5類]に移行されたので、外部研修や資格取得を奨励し、研修や試験が速やかに受けられるようにバックアップ体制が整っている。法人で行う研修会にも職員が交代で参加し、職員一人ひとりの介護知識と技術の向上に取り組んでいる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
15		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	外部研修等で交流する機会を持ち、他施設との違いや共感、学びなど参考にしサービスの質の向上に取り組むようにしている。新型コロナウイルス感染対策にて、交流する機会が少なかった。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
16		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前からアセスメントをとり、本人及び家族からの不安や要望を見出し、信頼関係を築けるよう働きかける。他者との共同生活が円滑に行え、安心して生活できるように対応を検討していく。		
17		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居前より家族と十分話す機会を持つようにし、不安や要望の把握に努める問題解決に努める。入居後は定期的に生活状況を伝え、いつでも相談してもらえる関係作りを目指している。		
18		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人に対して必要なサービスは何なのか、必要な支援がグループホームであるのか、ケアマネジャーや家族と検討し対応している。問題に対して、優先順位をつけ解決に努める。		
19		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	職員は、共同生活の場である事を理解した上で、生活の協力者として、時には冗談を言い合いながらできる事はしてもらう。安心して生活でき、入居者同士も良い関係が保てるよう支援している。		
20		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族に生活の様子を伝え、要望や相談できるように定期的に連絡を取っている。負担にならない範囲で協力を求め、一緒に支援していく姿勢でよりよい関係作りに努めている。		
21	(10)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	馴染みの人が連絡してくることはほとんどない。あれば、家族に確認し対応している。新型コロナウイルス感染対策にて面会が難しかったが、現在は、制限はあるが面会可能となっている。	コロナ対策以前は、家族や親戚の面会が多かったが、現在は状況判断しながら、制限付きで面会出来るように取り組んでいる。また、電話で話が出来るように支援したり、ホーム便りに利用者の写真をたくさん載せて送付する等、家族が少しでも安心出来るように配慮している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	他者との関係性を日々観察し、職員同士情報を共有、必要時には職員が関わり良好な関係が保てるよう配慮している。活動や行事なども全員が参加できるよう内容を工夫をし対応している。		
23		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	入居継続が困難になった場合でも、相談を受け助言や支援を行う体制を整えている。退居後も連絡があれば、対応している。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
24	(11)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	本人の意向や希望、不安などを関わりの中から本人がどうかで導き出している。必要時、担当職員を中心に職員全員で対応方法を検討し実施している。	ホームでの暮らしの中から職員は、利用者の思いや意向を聴き取り、その思いが実現出来るように取り組んでいる。意向表出が困難な利用者には、家族に相談したり、職員間で話し合い、職員が利用者に寄り添い優しく話しかけ、利用者の表情や仕草を観察しながら思いや意向を汲み取っている。	
25		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	定期的にフェイスシートの見直しを行い、サービスの内容について、いつでも確認できるよう保管し、把握に努めている。本人や家族、ケアマネなど、情報を収集し全職員で共有している。		
26		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	現状の心身状態の把握とサービス内容、日々の様子を記録し、全職員での情報共有に努めている。個々の情報に基づき、有する能力を把握し維持できるよう対応している。		
27	(12)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	定期的に家族に状態を説明し話の中から要望を聞き取り、担当職員を中心に情報収集及びケアプランの評価や見直しを行っている。必要時、主治医や栄養士などに相談しアドバイスを貰っている。	利用者や家族と職員が話す機会を設け、意見や要望、気になる事を聴き取り、カンファレンスで話し合い、利用者本位の介護計画を6ヶ月毎に作成している。利用者の状態変化に合わせて、家族や主治医と話し合い、現状に即した介護計画をその都度作成している。	
28		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	関わりの中でのいつもと違う小さな変化や気づきなど、記録に残し伝達するよう働き掛けている。連絡ノートや申し送り等を活用し全職員で情報を共有している。必要時、サービスの見直しや対応方法を変更している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	日々の入居者の状況に合わせてその時その場での支援、対応を行うよう努めているが、難しい場面も多々ある。必要時、家族に連絡、相談し支援の変更を説明している。		
30		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	一人ひとり生活してきた環境が違う事を理解し、地域資源が活用できるよう取り組んでいく。感染対策の面から制限がある。		
31	(13)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	宇部西リハビリテーション病院にて、定期的に受診を行っている。緊急時等、いつでも相談できる体制を作っている。主治医へ相談後、専門科の受診が必要な場合、家族が希望する医療機関を受診できるよう連携を取りながら支援している。	母体が医療法人であるので、契約時に利用者や家族の承諾を得てかかりつけ医として決定している。定期的な受診に職員が同行し、結果を家族に報告している。他科受診は家族と協力して受診している。夜間の急変時には、主治医や訪問看護師に相談して指示を得て対応している。	
32		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	定期的に訪問看護の来所があり、アドバイスを受けている。必要時、主治医や訪問看護と連携を図り安心して生活できるよう健康管理の支援を行っている。		
33		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時、病院の地域連携室や病棟担当者と連携し情報収集を行っている。早い段階で方向性を出せるように状態の確認を行っている。必要であれば病院を訪問し、受け入れの体制作りにも努めている。		
34	(14)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	事業所の役割を理解した上で、家族の意向を考慮し、主治医へ相談、状態把握と方向性を共有し、より良い支援ができるよう取り組んでいる。地域関係者との連携はほとんどない。	契約時に利用者や家族と話し合い、ホームで出来る支援について説明し、承諾を得ている。利用者の重度化が進むと家族と密に連絡を取りながら主治医も交えて話し合い、状態が悪くなり入院されるぎりぎりまで、利用者が安心して過ごせるよう環境整備に取り組んでいる。	
35	(15)	○事故防止の取り組みや事故発生時の備え 転倒、誤薬、行方不明等を防ぐため、一人ひとりの状態に応じた事故防止に取り組むとともに、急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身につけている。	リスクマネジメント会議に毎月参加し、リスク報告やヒヤリハット報告、事例検討会など報告し、全職員に伝達している。新型コロナウイルス感染対策にて勉強会や訓練を控えていたが今年度より再開し計画、実施していく。学研での自己学習と自己研鑽も行う。	毎月開催のリスクマネジメント会議に職員が参加し、職員会議で伝達を行っている。コロナ禍の中で、研修会や災害対策訓練などが出来なかったが、新型コロナウイルス感染症5類移行に伴い、外部研修に職員が交代で参加し、介護技術の向上と職員一人ひとりの意識の高揚に取り組むことを検討している。	

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
36	(16)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	定期的に火災(昼間及び夜間想定)や水害時の避難訓練を、入居者含めて実施し感染者に対しての対応も行っている。宇部西リハビリテーション病院が災害時の避難場所となっており、地域との協力体制を築くよう取り組んでいる。	水害を想定した訓練はグループホーム単独で行い、火災想定での避難訓練は他の事業所と合同で昼夜を想定して実施している。非常口や避難経路、避難場所、通報装置や消火器の使い方を確認し、利用者が安全に避難出来る体制を整えている。非常時に備えて非常食は法人一括で備蓄し、母体医療機関が避難場所となっている。	
Ⅳ. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
37	(17)	○一人ひとりの人格の尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	認知症の再確認、その場に応じた言葉遣いや行動、尊重とプライバシーを確保しながらも、親しみを感じてもらえるような対応に心掛ける。接遇委員会による啓発や研修(学研や資料の閲覧)などもある。	利用者のプライバシーを守る介護の在り方を職員間で話し合い、利用者の個性や生活習慣に配慮した介護サービスに取り組んでいる。言葉遣いや対応に注意し、利用者のプライドや羞恥心に配慮したサービス提供を目指している。また、利用者の個人情報の保管や職員の守秘義務については、管理者が職員に説明し、情報漏洩防止の徹底に取り組んでいる。	
38		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日々の関わりの中で、思いや希望を話せるような雰囲気作りや言葉かけを行っていく。動きや表情などのサインやいくつかの選択肢を決め選んでもらう等、本人の意思の確認を大切にし気付きを意識している。		
39		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	できるだけ希望に添えるよう、個々の生活スタイルやペースを元に安心して生活できるよう支援する。事業所や病院の都合で難しい部分もあるが、できる範囲で対応している。		
40		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	本人の好むものを着てもらうようにしている。困難な方には、季節に応じた物を職員が準備している。衣類の確認等を行い、必要時には家族へ連絡している。化粧品の購入や美容院など、家族と相談しながら支援し、出張美容院を依頼し利用してもらっている。		
41	(18)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	食事は、病院の厨房から提供の為、調理などは行っていない。食事前にメニューを紹介し嗜好の指標確認を行っている。食器洗いやテーブル拭き等は一緒に行っている。行事や活動の中で調理活動(おやつ作りなど)を行い、出来ることの維持を図っている。	母体医療法人厨房で作られた栄養バランスの取れた料理を配食している。給食委員会を2ヶ月毎に開催し、パン、刺身、麺類の日を設定し、利用者の嗜好に合わせた美味しい料理を提供している。毎月のお楽しみ会では、たまごサンドと一緒に作ってベランダで食べたり、あんみつ作り挑戦する等、食べることを楽しめるよう支援している。	
42		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	管理栄養士の献立により栄養のバランスは取れている。様々な食事形態を準備し、入居者の状態に合わせて対応している。水分摂取の為、お茶ゼリーやポカリゼリーも提供できる。必要時、主治医や栄養士に相談し対応している。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、口腔ケアを実施し、自分で行うのが難しい方には職員が対応している。必要時、訪問歯科や言語聴覚士へ相談しアドバイスをもらっている。		
44	(19)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立に向けた支援を行っている	日中はトイレでの排泄を基本とし、排泄チェック表を活用して本人の排泄パターンの把握、定期的なトイレ誘導を行っている。入居者の行動やサインに注意し配慮して声掛け、対応を行っている。	職員は利用者の排泄パターンを把握し、早めの声掛けや誘導を行い、重度化しても職員2人体制で、トイレでの排泄支援に取り組んでいる。夜間帯は利用者の希望や体調に配慮しながらトイレ誘導やオムツ、リハビリパンツ、パットを使い分ける等、利用者が快適に過ごせる支援に取り組んでいる。	
45		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排便状況の把握、食後のトイレ誘導を行い習慣化するように働きかけている。細目な水分補給やオリゴ糖の活用、乳製品などを使用して自然排便を促している。必要時、主治医の指示薬を使用し対応している。		
46	(20)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々に応じた入浴の支援をしている	入浴は、週3回実施している。本人の希望があればいつでも入浴できる体制を作っている。入居者の状態や希望にあわせて、入浴できるよう配慮している。気持ちが向かない場合や状態により、中止したりシャワー浴や清拭を行っている。	入浴は利用者の希望や体調に配慮しながら、週3回を基本としている。湯船にゆっくり浸かりながら、利用者と職員が一对一でゆっくり会話できる大切な時間と捉え、コミュニケーションに努めている。入浴を拒む利用者には、時間をずらしたり、職員が交代して勤めているが、無理な場合は清拭や足浴に変更し、清潔保持に取り組んでいる。	
47		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	室温や居室の明るさ、静かな環境や寝具を準備し夜間の安眠に繋げるよう配慮している。一日を通して休息や活動等、個々に合わせて支援している。		
48		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	内服薬マニュアルの手順に添って服薬管理を行なっている。服薬一覧表の作成、目的や副作用などについて、いつでも確認できるようにしている。状態変化時、主治医へ相談している。薬の変更時等、情報を共有、伝達し状態の観察にて内容を検討している。		
49	(21)	○活躍できる場面づくり、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	定期的に行事や活動を計画し実施している。時期(季節)に合わせて内容を検討している。日常生活の中で、役割を持って出来る事を行ってもらっている。強制や負担にならないよう配慮し、楽しむ事や満足感が得られるよう支援している。	新型コロナウイルス感染症5類移行に伴い、計画的に行事や活動に取り組み、ホームの暮らしの中で、利用者一人ひとりの能力を活かしながら活躍できる場面を設け、やる気を引き出し、利用者の生きがいに繋げている。ベランダの畑で季節の花や野菜を育てることも、利用者の大きな楽しみである。	

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50	(22)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	定期的に外出する機会を準備したり、本人から希望があれば家族の協力のもと、買い物等の支援を行っている。現在は、新型コロナウイルス感染対策にて、外出が困難となっている為、制限がある。	コロナ対策以前は、家族の協力を得て、花見や外食、買い物等に出かけ、利用者の生きがいに繋げていた。ホームの畑で野菜や花、果物を栽培して収穫し、草取りや水まきを利用者と職員が一緒に行い、収穫して食べる楽しい時間を過ごしている。また、気候の良い時期には敷地内を散歩して気分転換を図っている。	
51		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	基本的には事務所で管理している。少額ではあるが事業所でも管理しており、希望時にはいつでも使用出来るようにしている。家族の同意の元、所持している方もいる。		
52		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	本人の希望があれば、対応するようにしている。(その際、必ず家族の確認をしている)		
53	(23)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共用の空間は不快な刺激がないように整え、壁面は入居者と一緒に季節が感じられるものを作成し掲示している。ベランダの畑(花壇)には、入居者と一緒に季節に応じた野菜や花を植え、成長や収穫、季節を感じてもらえるよう支援している。	明るく広々としたリビングルームでは、利用者と職員が体操やゲームで盛り上がり、楽しいひと時を過ごしている。壁には利用者と職員が一緒に制作した作品を季節毎に掲示し、明るい雰囲気の良い共用空間である。ホーム内はバリアフリーで清掃も行き届き、清潔で落ち着いた雰囲気の良い共用空間である。	
54		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	共有の空間でも好きな所で過ごしてもらえるように、ソファや椅子を準備している。ユニット間も自由に行き来出来るようになっている。		
55	(24)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	使い慣れた道具、日用品などを持参してもらっている。入居者本人が安心して、居心地よく生活できる環境作りに取り組んでいる。	入居前に利用者や家族と話し合い、利用者が大切にしていた家具や寝具、大切な物、家族の写真、生活必需品を持ち込んでもらい、自宅と違和感のないように工夫し、利用者が安心して穏やかに暮らせる居心地の良い居室である。居室は畳敷きであり、利用者によっては長年の習慣から布団を敷いて眠る方もいる。	
56		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	一人ひとりの出来る事や能力に合わせて、継続して行ってもらえるように勧めている。負担に感じない範囲で役割や日課になるように職員も関わり、能力の維持、理解してもらうための対応方法、自立への支援を行っている。		